

伊勢湾周辺地域における 弥生時代の平野地形について

● 石黒立人

弥生時代に関わらず集落を基礎とする地域論を展開するためには地形環境を復元することが必須の作業である。しかし、沖積平野は弥生時代に至ってもなお形成途上にあり、地形を動態として捉えることが求められる。しかし、われわれが入手しえる地形情報の多くは現地表の観察に基づくものであり、到底弥生時代に適用できるものではない。そこで発掘調査成果が重要となる。各地で日々実施され、蓄積され続けている発掘調査データこそまさに地形変遷の詳細を明らかにするものである。しかし、現状をみると残念ながら十分に活用されているとはいえない。

本稿では最近蓄積された良好なデータに基づいて地形変遷を明らかにすることを試みた。その結果、縄文晩期に地形の大幅な更新があったこと、伊勢湾周辺では沖積平野に限っても、主要河川の河口部には砂堆が形成され、潟や後背湿地が点在する複雑な海岸線であったことが窺えた。

1 たとえば、現在の濃尾平野

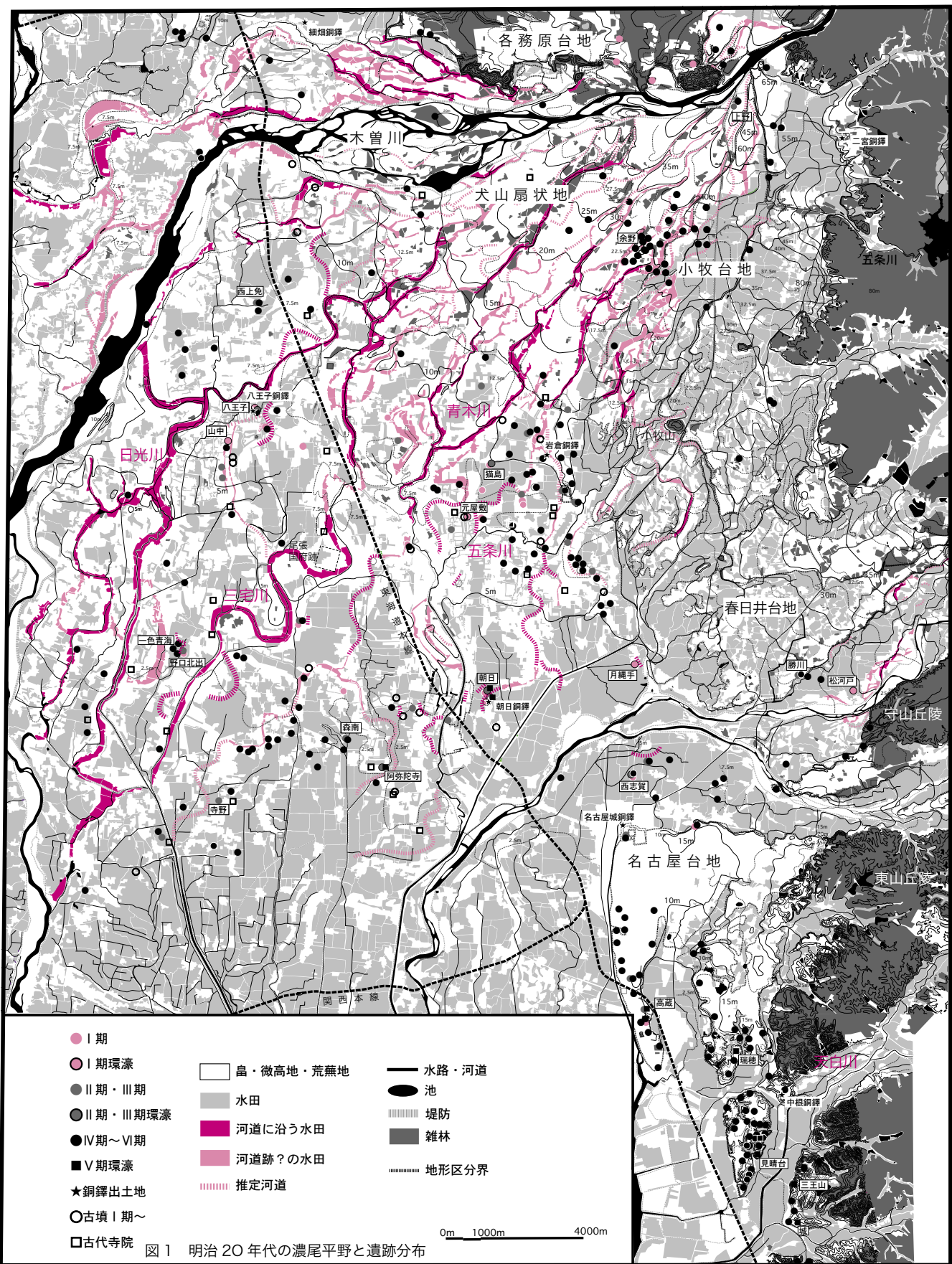
現在の濃尾平野は、南端のウォーターフロントがすべて堤防で護岸された干拓地であり、自然の海岸線はその影すら無い。江戸時代の旧海岸線付近は標高ゼロメートル地帯となり、愛知県埋蔵文化財センターの本部がある海部郡弥富町周辺は全くの海面下にある。

弥生時代の遺跡分布の南西端である津島市から北東に進むと、日光川の高い堤防によって視界を遮られる。日光川、そして三宅川を越え、植木畑が点在する愛西市・稲沢市を、ほとんど起伏を感じることなく通過する。一宮市に入り五条川から分かれた青木川沿いを進む。青木川の堤防はいつしか小規模なものになり、五条川との合流点付近の規模に比べれば貧弱な印象を受ける。岩倉市・一宮市の市境を抜けて江南市に至る。このあたりから犬山扇状地となる。ようやく行く手の道路に緩やかな起伏が始まる。扶桑町までくると、旧流路とそれに挟まれた高まりが明確なコントラストをなし、行く手の左前方に見え隠れする小山とともに景観にアクセントをつけている。犬山市にはいる。段丘斜面の急坂をのぼっていくと、左右は城下町の風情

を残す町並みとなり、ほどなく国宝犬山城に至る。

濃尾平野北東部の一角を占める犬山扇状地は、地形図では等高線が弧をなして重畳し、犬山城の西を収束点として幾筋もの旧流路が放射状にのびている。扇状地は標高10mあたりから45mまでの半径約15kmの広がりを持ち、斜度は平均2.33%である。旧流路は扇状地高位面では直線的、低位面では屈曲の度合いを増す。明治20年代の地図（図1）によれば、標高12.5m以上では、水田の分布は現・旧流路付近に限定され、他は雑木林・竹林や桑畠となっている。水田耕作には不向きであったことがわかる。犬山扇状地における遺跡分布が縄文時代前期を遡らないことからいえば、地形が安定した時期がおおよそ知れよう。しかし、扇頂部付近の安定度に対して、流路と微高地の比高が小さくなる扇央部から扇端部にかけては流路の水位の上昇によって地表面が影響を受けた可能性が高い。とりわけ扇端部では、沖積面への移行部分で小さな谷が開析して小扇状地が形成される、というように順次堆積が進行したであろう。この点で、扇状地そのものの成長過程の復元が不可欠である。

南東側のほとんどを占める沖積地は、近世の海岸線からの幅が15～20km前後、高低差は



10mである。斜度平均は0.5～0.6%であり、本当に平坦である。このうち、濃尾平野の最南部は戦後になって地盤沈下が急激に進み、旧海岸線に沿う地域は現在海面下となっている。が、濃尾平野の場合、南西端にいくほど地盤の自然な沈降が進むとされ、少なくとも年に1mmは沈降するとさえ言われている。人為的な影響による地盤沈下と自然現象としての沈降をどのようにデータとして区別するのか、実のところ容易ではないようだ。

濃尾平野を縫う河川は、ほとんどが江戸時代には付け替えられ、直線的な流路に改修されたり、人工的に合流させられたりしている。しかし三宅川のように大蛇行を残す例もあり、かつて国府が置かれたことと関係するのであれば、本格的な河川制御、つまり大規模な築堤の開始時期が問題になろう。

以下では、発掘調査の成果から弥生時代の地形に迫ってみたい。対象とするのは、変化を続ける伊勢湾周辺地域の沖積地、および旧海岸線である（註1）。

2 伊勢湾西岸域

(1) 安濃川下流域の事例

安濃川下流域は長岡丘陵（「見当山丘陵」とも呼称される）と半田丘陵に南北を画され、その間に広がる沖積平野のほぼ中央を安濃川が蛇行している。安濃川の河口部には三重県庁所在地である津市街地が南北に広がる。津市の原型は藤堂藩津城下町であり、河口右岸側の砂堆上に展開した。現在では砂堆の存在はまったくわからないが、「藤方」などの地名にかつての「潟」の存在が窺える。

安濃川下流域では近年、中勢バイパス建設に伴って平野を南北に横断する遺跡調査が行われ、関係遺跡の報告書もすでに順次刊行されている。小規模な平野とはいえ、発掘調査によって詳細なデータが得られたことは希有なことであり、きわめて貴重である。

かつて、1973年から1976年にかけて行われた納所遺跡の発掘調査に際して微小化石分析が行われ、植生を含めた自然景観が復元された。

安田喜憲氏は低湿地に囲まれた微高地上に立地している景観を描いた。その後、1997年に刊行された安濃津遺跡の報告書においては、地籍図等を含めた諸資料によって微地形分析が行われ、砂堆と潟湖の復元案が提示されている。本稿では、これらの報告も参考にしつつ弥生時代の地形変遷と遺跡分布の関係について触れる。

中勢バイパス関連で調査された遺跡の概要を北から順にみる（表1参照）（註2）。

北の長岡丘陵上には、やや平野から奥まった位置に長遺跡・山籠遺跡（IV期単純）がある。長遺跡は、浸食が進んで多くの谷が樹枝状に開析する丘陵地帯のほぼ中ほどにあり、居住域はいくつかの丘陵頂部に分かれて分布している。このうち、中勢バイパス関連調査で明らかになった居住域は丘陵の頂部平坦面から斜面にかけて広がるが、階段状に造成された段状遺構に営まれる斜面居住域は奇異な印象を与える。地形的にみて、平坦面は他の丘陵にもあり、斜面まで居住域としなければならない理由は一応は無い。「集住」するためであったなら、その集落設計の系譜・背景が問題となろう。

宮ノ前遺跡（V期初頭）は丘陵西端に位置し、平野を臨む斜面に営まれている。

森山遺跡（弥生V期～古墳I期）は現状では独立丘として扱われている。しかし、埋没旧地表においては低い按部を介して丘陵とつながっている可能性がある。

森山東遺跡は森山遺跡の東にあり、緩やかな丘陵裾部斜面にV期？の水田が見つかっている。弥生前期の土器が出土していることから、付近に当該期の包含層が存在したらしい。

太田遺跡ではV期以後の遺物を含む大規模な流路が検出されている。南側は無遺構区域であり、後世の削平による。

松の木遺跡は縄文晩期後半に属す竪穴建物跡・土坑・流路が検出され、該期では唯一居住地の様相を見せている。II期には方形周溝墓が営まれるが継続しない。遺構検出面は南に向かっていったん下降し、また上昇に転じて蔵田遺跡に至る。

蔵田遺跡は縄文晩期後半の流路が形成した微高地にII期の集落が展開するが、III期に継続しない。V期以後は盛んに流路群が掘削され、井

堰なども検出されている。微高地上が水田域になったことを示している。

位田遺跡はⅥ期の方形周溝墓が営まれており、それ以前に遡る資料は無い。遺構面下部には砂層が堆積し、それ以前は浅谷であった可能性が高い。新しく形成された自然堤防といえよう。濃尾平野の土田遺跡と様相が類似している。

替田遺跡・武之坪遺跡では縄文晩期の土器が出土しているが遺構は認められない。替田遺跡は南北とも流路で画される。Ⅱ期～Ⅲ期前半の集落で、Ⅳ期以降に継続しない。

里前遺跡に向かつてはさらに下降し、里前遺跡では高位面でⅥ期の溝、梁瀬遺跡では縄文後期？に遡る埋積谷が検出されている。ここから南は丘陵であり、標高は急激に上昇する。

さて、これらの遺跡の発掘調査報告書には土層セクションが掲載されている。ただ、土層セクションは遺跡・調査区ごとに完結しているため、遺跡を越えた相互の関係は直接にはわからない。だが、主要遺構の埋没年代によって大雑把につなぐことはできる。その結果が図2である。

弥生時代の基盤形成を考える上で重要なのは、先述したように縄文晩期後半（突帯紋系土器期）の自然流路が松の木遺跡・蔵田遺跡で検出されていることである。どちらも縄文晩期後半に限られ、弥生前期までは下らない。蔵田遺跡では弥生前期の溝が検出されているが、位置は流路とずれている。流路の活動は活発で、それによって側方浸食が進み蛇行する。それが極限に至って、蛇行する流路の屈折点が直通して切り離された結果、河跡湖化して埋没する。蔵田遺跡の蛇行する流路跡はそうした経過を表しているのであろう。そして、弥生前期の溝が並行して掘削されているのは、流路の痕跡が地表面に残存して影響を与えた可能性がある。いっぽう松の木遺跡では小規模ながら居住の痕跡がある。推定地表面標高は蔵田遺跡よりも高く、比較的安定した環境であったのだろう。

東方の納所遺跡では弥生前期の蛇行する流路群が検出されている。流路からは縄文晩期終末の土器も出土しており、松の木遺跡や蔵田遺跡よりは年代が新しいものの、縄文晩期まで遡る可能性がある。報告書によれば、この流路は弥

生前期で埋没すると判断されているようだが、Ⅱ期の土器が集中して出土したSD08がちょうど流路に重複していることをみると、弥生中期前葉にはまだ窪地状であり、SD08の掘削位置はその影響を受けた可能性を残す。つまり、完全な埋没は弥生中期初頭まで下る可能性がある。現状での問題は、この流路の上流部が23号バイパス関連調査地点のどこにあるかだが、残念ながら明確ではない。

ともかく、これら流路の活動に伴う自然堤防の形成が縄文晩期に進行して、弥生時代の基盤面を形成したことは確かである。蔵田遺跡では縄文後期の土器が標高5.7mから出土しており、弥生時代の推定地表面標高とは1.3mの差がある。それだけ地表面が上昇したのである。場所は違うが、鈴鹿川下流右岸の上箕田遺跡でも縄文晩期後半の流路が検出されており、同様の現象があったのであろう。

このように、流路の活発な活動によって縄文晩期に自然堤防が形成された。ひとつは松の木遺跡から納所遺跡へつながり、また蔵田遺跡に分岐する微高地Ⅰである。そして、南の替田遺跡や武之坪遺跡では縄文晩期末の土器が出土しており、遺跡が形成されるよりも古くに微高地は形成されていたようであるが、その形成過程や広がりにはわからない。これらも自然堤防と看做せば、主要な流路は少なくとも2条存在したことになるが、いずれにしても両者が分流であったのか、前者から後者への流路の遷移があったのかについて決定するデータは無い。あくまで現状で言えるのは、主要な2つの微高地（Ⅰ・Ⅱ）があり、北側の長岡丘陵との間に大きな谷（谷A）、その南には自然堤防上の窪地、微高地Ⅰと微高地Ⅱの間に谷B（現在の安濃川の流路付近）が想定できる点である。谷Aは、弥生後期に至るまで微高地Ⅰとは2m以上の比高を保つ明確な谷であり、南斜面からは水田が検出された。遺構面が一段低いために、後世の削平・改変の影響を受けず遺存したのであろう。自然堤防上の窪地は平面的な広がりが全く不明であるが、安田喜憲氏によれば湿地であった可能性もある。

海側には幾列もの砂堆が形成されている。このうち、もっとも陸地に近い第1砂堆に弥生

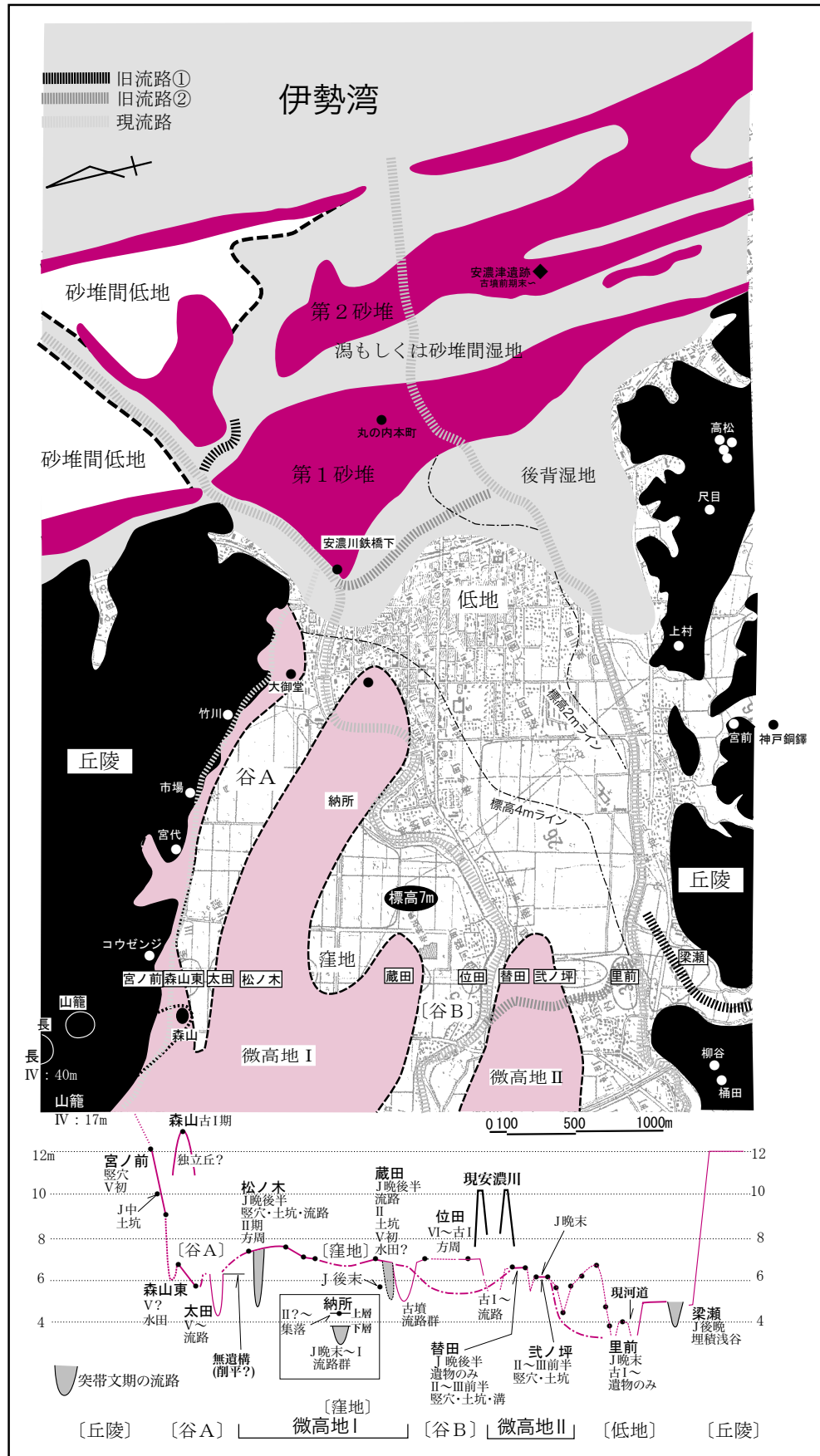


図2 安濃川下流域における遺跡分布と横断模式図

表 1 関連遺跡一覧

No.	遺跡名	地形	標高 (m)	検出遺構	時期	備考	文献
1	山籠	丘陵頂部	16~20	竪穴建物・土坑	IV	竪穴建物に排水溝が付設	三重県埋蔵文化財センター（以下同）1995『大古曾遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』
2	宮ノ前	丘陵斜面	8~11	竪穴建物	V前半		
3	森山東	緩斜面	5.6~6.7	水田	V		1993『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』
4	太田	平坦地	6~6.5	大溝	V~	大溝から縄文後晩期土器が出土	
5	松の木	微高地	7.5	竪穴建物・自然流路 方形周溝墓	突帯紋土器期（五貫森期） II		
6	蔵田	微高地	7	自然流路 掘立柱建物・方形周溝墓 流路・井堰	突帯紋土器期（五貫森期から馬見塚期） II V初頭？	基盤下部からは縄文中期から後期の土器が出土	1999『蔵田遺跡発掘調査報告』
7	井田	微高地	6.7	方形周溝墓	VI	基盤は砂層・砂質シルトであり、流路に相当する	1999『井田遺跡発掘調査報告』
8	替田	微高地	6.6	竪穴建物・土坑・溝・自然流路	II末~III前半		2004『替田遺跡（第4次）発掘調査報告』
9	式之坪	微高地	6.5	竪穴建物・土坑	II~III前半		2005『式之坪遺跡発掘調査報告』
10	里前	沖積地	5.6	溝	VI~		2002『里前遺跡発掘調査報告』 2005『里前遺跡（第2次）発掘調査報告』
11	梁瀬	沖積地	5.2	自然流路	III	幅60mの埋積谷がある。縄文後期？	2004『梁瀬遺跡発掘調査報告』

時代の遺跡が形成されているが、詳細は不明である。第2砂堆の陸側に位置する安濃津遺跡では石鏃が出土しており、この部分まで陸化していた可能性がある。雲出川下流域では、陸側の砂堆第1列に弥生前期前半の中ノ庄遺跡が位置しており、その点を参考にするなら、安濃川下流域においてもその基盤形成が縄文晩期以前に遡る可能性は十分にある。

弥生時代の安濃川下流域の沖積平野は、北側に谷と微高地、南側に低地が広がる。海側には第1砂堆が形成されており、第2砂堆は形成途上であっただろう。以上が、本稿で推定した安濃川下流域の自然景観である。その形成要因となった原安濃川の本流についてこれまでの発掘調査によっても特定されてはいない。

現在の安濃川は平野のほぼ中央を西流している。一部蛇行し自然状態であるかのような姿を見せているが、江戸時代には南の半田丘陵側に大きくそれており、新しく付け替えられたものであることが知られている。安濃川下流域の平野は北西から南東に向けて傾斜しており、しかも半田丘陵付近ではさらに一段落ち込むように低くなっている。現在でも標高2mと標高4mのラインは半田丘陵側に収束している。この収束点付近に里前遺跡・梁瀬遺跡があり、両遺跡

の地表面は他の遺跡に比べて最も低くなっている。梁瀬遺跡では縄文後期に遡る埋積谷が検出されているので、古い時期の谷（流路）がこの低地につながる可能性が高い。現標高2m以下の区域に関して、どれだけ遺跡が分布しているのか、あるいは分布しないのか、現状では明確ではない。この低地は、湿地もしくは干満の影響を受ける潟になっていた可能性も十分に考えられるのであり、今後の探究が期待される。

(2) 雲出川・櫛田川下流域の事例

雲出川下流域については高橋学氏による微地形分析が行われているようだが、残念ながらその詳細を私は把握していない。ここでは、櫛田川下流域も含めて旧海岸線と砂堆列について触れるにとどめる。

土地条件図によれば、図3のように自然堤防に加えて砂堆が示されている。そして、雲出川最下流域の砂堆は比較的良好に把握できるものの、南方の櫛田川最下流域は流路の乱流による自然堤防の拡散や新田開発によって分断されて大きく乱れている。したがって、ここでの議論において櫛田川下流域は除外する。

雲出川最下流域には現海岸線沿いを除いた2列の砂堆が読み取れる。そのうち、もっとも陸

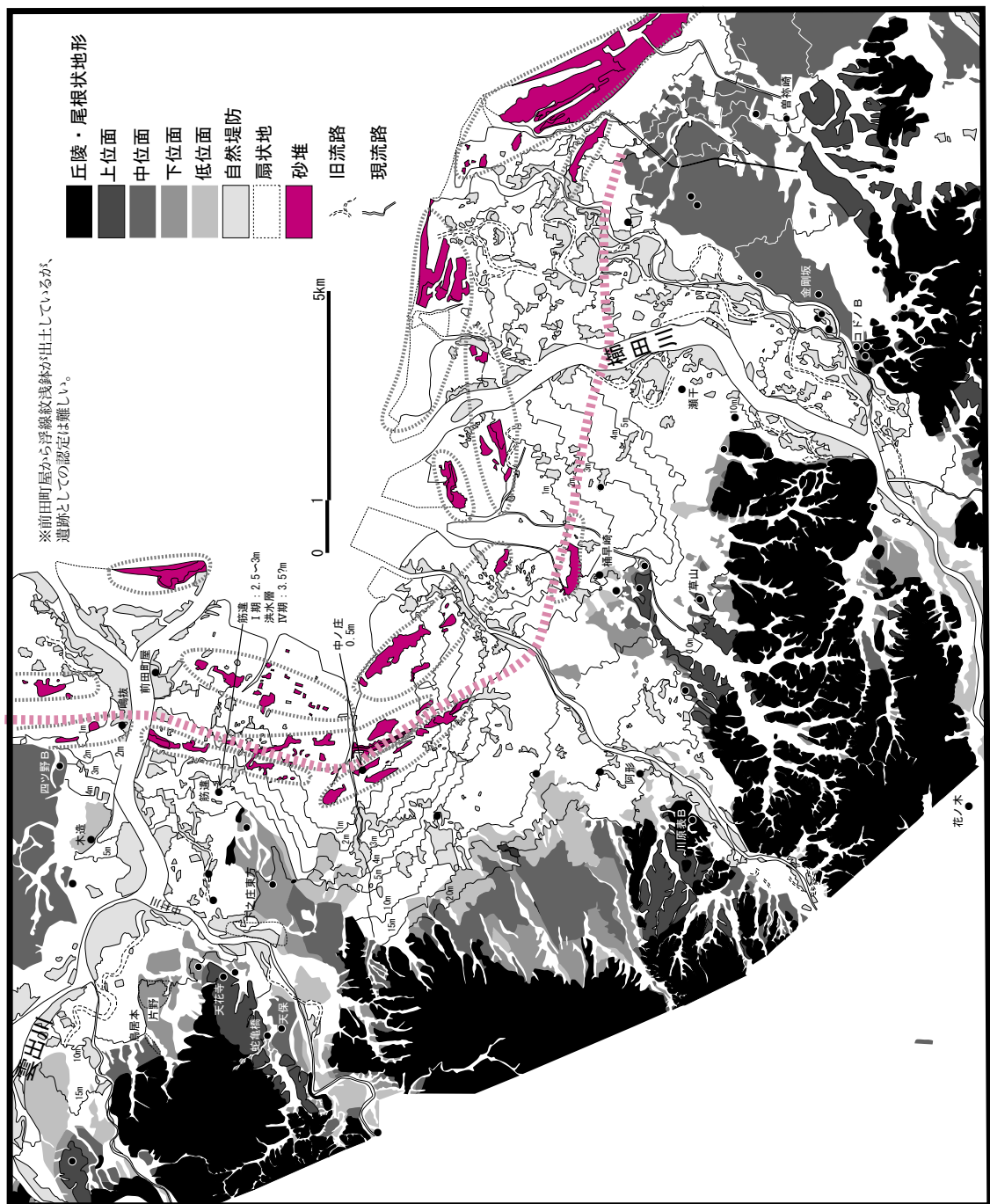


図3 雲出川・櫛田川下流域地形図(土地条件図を参考に作製)

地よりの第1列に嶋抜遺跡や中ノ庄遺跡が立地している。第1列は大きく西の陸側に湾入しており、陸側の等高線も他に比べて間隔が詰まっており、傾斜は急である。砂堆第1列が弥生時代の海岸線に近いなら、沖積平野はさきわめて狭いものとなる。かりに砂堆の西側に後背湿地や潟が形成されていたならば、沖積平野の範囲はさらに狭まることになる。

雲出川下流域における遺跡分布は、砂堆を除けば現在の地表面標高4m以上の地点に位置している。実際の遺跡の検出面はそれより低くなり、筋違遺跡の場合、弥生前期面は標高2.5m～3mで、現地表から1.5～2mほどマイナスとなる。これだけの堆積を見込むなら、現標高3m以下の範囲は湿地もしくは干満の影響範囲となる。雲出川や櫛田川下流域における堆積(あ

るいは沈降)の進行が一律ではないにしても、現状の遺跡分布が生活環境をある程度反映しているとするれば、弥生時代における海岸線の想定ラインは図3に示したように砂堆第1列東側の破線のようなだろう。

3 伊勢湾東岸域

(1) 濃尾平野

濃尾平野では縄文海進の後、多くの微高地が沖積平野面上に姿を現すことになった。それらのいくつかには縄文中期末(山ノ神式期)になって人間活動の痕跡が記されるようになり、縄文後期にはさらにその密度も上昇する。しかし、確実な定住を示す遺跡は、縄文中期には師勝町熊之堤遺跡、縄文後期には犬山扇状地末端付近に位置する岩倉市権現山遺跡、晩期後半は一宮市馬見塚遺跡、同山中遺跡に限られ、ほかは散布地程度の貧弱な内容にとどまっている。

弥生時代になると、縄文中期以後断続的に利用された微高地と、利用が縄文時代に辿ることのできない微高地の両者に遺跡が形成されるようになる。朝日遺跡は標高が約2.7mであり、前者のうちで最も標高が低い。朝日遺跡の南西端に位置する貝殻山貝塚周辺は弥生初期の居住域であるが、ここからは縄文中期から晩期にかけての土器も少量出土している。

弥生時代を初現とする遺跡は標高3m以下が多く、濃尾平野でも海岸よりの区域に位置している。しかし、貝塚が形成されているのは名古屋市西志賀遺跡のみであり、海岸に近接しているとはいえ、貝塚形成が一般的というわけではない。こうした事例は、生業問題をけっして極小環境下に限定して捉えてはならないことを示している。

朝日遺跡は、埋積浅谷を挟んで並列する自然堤防上に居住域や墓域が広がる、弥生時代の全期間にわたって営まれた遺跡である。遺跡の初期は微高地の南西端(貝殻山貝塚周辺)に居住域が限定され、その後北東に向かって拡大を続ける。この埋積浅谷は縄文海進後の海水準の低下によって形成されたもので、弥生時代になっても底面と自然堤防上面の比高は3mをこえ

る。この埋積浅谷に恒常的な流路の存在が認められるようになるのは弥生後期になってからであり、それ以前はⅢ期前半に砂層の形成が一時的に認められるのみで、間欠的である。

この点は、われわれが発掘調査で検出する自然流路について、それが当初から継続して流路であったのかどうか、についての吟味を必要とする重要な根拠となる。自然流路を谷地形と認定するかどうかは、単に個別の地形をどのように認識するのかという点にとどまらず、環境変動にまで問題が広がるからである。ちなみに、Ⅲ期前半の砂層の堆積は阿弥陀寺遺跡や野口北出遺跡等、濃尾平野の複数の遺跡でも認められる現象であり、濃尾平野全域の環境変化と関係がある。このような<鍵層>を把握し、広範囲に追跡することが濃尾平野の変遷を復元する上で必須である。

ともかく、これまで発掘調査によって偶然とはいえ、いくつかの谷地形や自然流路が検出されている。それらは、

- ① 遺跡の景観を構成する事例(狭域事例)、
 - ② 濃尾平野の地形変遷を知る上で重要な事例(広域事例)、
- の二つに区分できる。

このうち、①は朝日遺跡の谷地形や稲沢市一色青海遺跡の自然流路、一宮市猫島遺跡の谷地形がある。②には、上述したⅢ期の砂層堆積、清須市土田遺跡の自然流路などがある。

一色青海遺跡では、西北西から東南東にのびる微高地にぶつかって蛇行する流路とその後背湿地がセットになって検出された。いずれも弥生Ⅳ期前半のうちには埋没しており、主要流路の移動が窺える。猫島遺跡は、北東から南西にむけて並列する二つの大きな谷に挟まれた微高地上に位置している。両谷とも弥生時代後期にはほぼ埋没して水田化されていたようである。新しい時期の流路は旧地形とは無関係に形成されており、周辺が埋没して後に形成されたのであろう。おそらく、猫島遺跡は犬山扇状地が沖積平野に移行する部分に位置していると考えられる。

土田遺跡では弥生終末から古墳初頭の方形周溝墓群と中世の居住域が見つかっている。このうち、方形周溝墓群が弥生後期に活動した自然

流路の堆積層上面に形成されていた。自然流路は幅約 60m で、地籍図では該当する範囲が島畑になっており、島畑はさらに南北に続いている。島畑部分がすべて微高地化した自然流路跡とは限らないが、方形周溝墓の削平状況から周辺に比べて高所であったことは確実である。

発掘調査では流路を含めて東西の連続土層セクションが記録されている。それによれば流路側方には、土層の上面から弥生後期初頭の台付甕が出土した黒褐色シルト層（「Ⅲ層」：標高 50cm ～ 70cm）を基盤に、細流砂とシルトのラミナが形成され、その上部に中粒砂が堆積して、高さ 1m 以上の自然堤防が形成されていた。この「Ⅲ層」からは汽水性ケイ藻も検出されており、海水の影響を受ける区域であったことも判明している。土田遺跡の南には大淵遺跡・阿弥陀寺遺跡、南西には森南遺跡がある。このうち、森南遺跡では弥生Ⅳ期のハマグリを主とする貝層が見つかった。それに対して、大淵遺跡・阿弥陀寺遺跡からは直接「海」に関わる情報は得られていない。

さて、今回の考察に先立ち、濃尾平野に分布する遺跡の各時期の推定地表面標高に基づき等高線図を作製した（図 4・5）（註 3）。

弥生前期は遺跡数が少なく蓋然性も低い、弥生中期以降は遺跡数が増加し、議論には耐え得ると考える。その結果、弥生時代を通して 2 つの谷地形が存在することがわかった。一つは、一宮市の＜谷筋 A＞、もう一つは清須市土田遺跡周辺から岩倉市にかけての＜谷筋 B＞である。実は、これらの谷地形は、愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏によれば濃尾平野の基底層にも存在するとのことである。つまり、谷地形は弥生時代を遡る遙か以前から存在したのであり、濃尾平野における不断の堆積もけっして地表面の平準化をもたらさなかったことになる。その谷筋 B の末端が弥生中期には阿弥陀寺遺跡と森南遺跡の間の海岸線を入り江状にしていた可能性が高いのである。

残念ながら谷筋 A・B の当時の具体的な様子はわからない。しかし、この部分が周囲に比べて一段低いのであれば、主要な流路が集中する区域であったことは間違いないだろう。たとえば谷筋 B についてみれば、現在の五条川中流域

は大きく蛇行しつつもほぼこのラインに沿っており、下流域で東に外れる。沖積化がそれほど進んでいなかった段階には下流域もこの軸線に沿って流れ、阿弥陀寺遺跡と森南遺跡に挟まれた入り江部分に至り、その汽水環境を成り立たせていた可能性は十分にあるだろう。

なお、図 4 では大胆にも海岸線を表現しているが、汽水性ケイ藻の検出例は少数であり、全域にわたって確証を得ることはできない。弥生中期についてはⅡ期（朝日式期）前半の遺跡分布を重視し、その後消滅する状況などを考慮して想定したものである。津島市方面への突出が顕著であるが、これは犬山扇状地からの中軸線の方に相当する。主要河川はこの軸線に沿って流下する傾向が強く、現在では三宅川流域となっている。弥生後期には等高線自体も大きく突出し、三宅川下流域においてさらに堆積が進行したことがわかる。朝日遺跡南方の入り江については、朝日遺跡における膨大な貝層・貝塚形成を考慮して海との距離を近く考え、また庄内川の河口域を大規模な谷地形と看做して想定した。もちろん、今後の調査によって確認される必要がある。

濃尾平野南部に接する名古屋台地の海岸線は、ほぼ陸と海が直接する区域である。後に「アユチガタ」と呼ばれ、縄文時代以後多くの遺跡が分布する。貝塚・貝層の形成も濃尾平野とは対照的に顕著で長期にわたり、海産資源の利用度の高さをよく示している。平野を介在させないで陸・海が直接する区域は、さらに知多半島周縁、矢作川下流右岸の碧海台地臨海部とつづく。

知多半島では、伊勢湾側に面する大きな谷の臨海部にいくつか砂堆が認められる。東海市の太田川河口部の南北には幅 500m ほどの大規模な砂堆（第 3 砂堆）が形成されている。左岸側の砂堆東側（後背地側）に位置する烏帽子遺跡は縄文晩期終末に遡る。烏帽子遺跡を含めて弥生時代前期の荒古遺跡や細見遺跡などを結ぶラインは砂堆の東側を通り、この部分の形成時期は安濃川や雲出川河口部の第 1 砂堆に対応する可能性がある。それに対して河口部右岸側には古い時期の遺跡は無く、砂堆の西側（海側）に位置する松崎遺跡は 5 世紀を遡ること

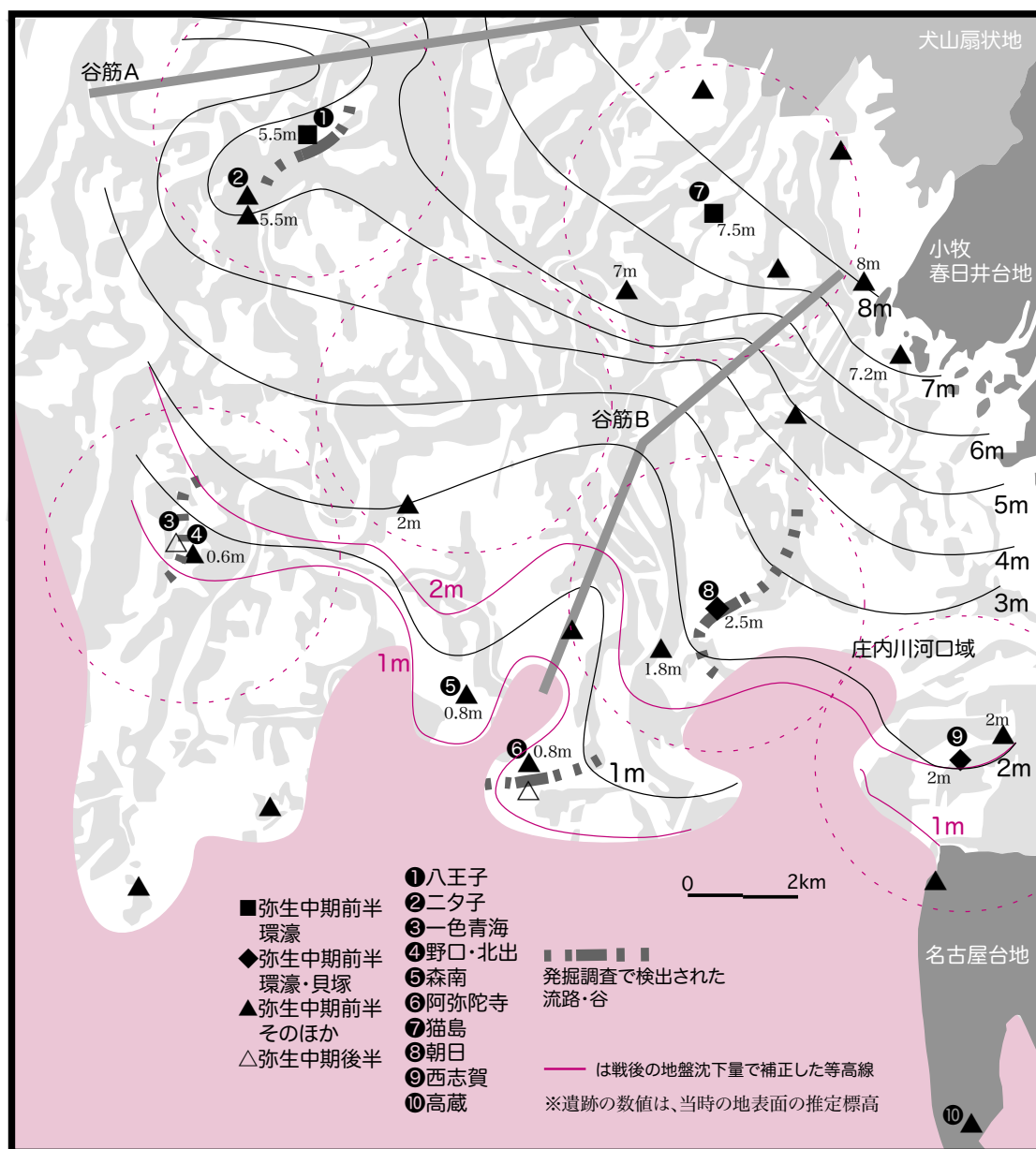


図4 濃尾平野南部弥生中期遺跡分布図

はない。第3砂堆の中央部が幅広いことを考慮するならば、複数時期の砂堆列が複合している可能性を考える必要もある。第3砂堆東方の陸側では、低地を囲む丘陵に至るまでさらに複数列（少なくとも2列）の砂堆が認められる。知多半島中央部にある内海谷でも縄文時代に遡る砂堆形成が認められる。

このように、知多半島の砂堆はもっとも海側の砂堆（の主要部分）の形成時期が縄文晩期（もしくは後期）である可能性が高いのに対して、西岸域ではもっとも陸側の砂堆が縄文時代晩期（もしくは後期）に遡る可能性が高いという違

いがある。砂堆列の形成時期の相違について一般論としては、地盤が沈降する伊勢湾西岸と隆起する伊勢湾東岸における構造的な差異である可能性もあるが、重要なのは当該期に活動可能な地表面を形成していたのかどうかの確定である。

知多半島東側から碧海台地にかけては海が台地縁辺にせまり、また谷奥に入り込んで埋没谷となり、複雑な海岸線を形成している。知立市の猿渡川下流域は珍しく弥生時代の遺跡が集中する区域であるが、縄文時代の貝塚が数多く形成されて後は、弥生時代前期を別にしてIV期ま

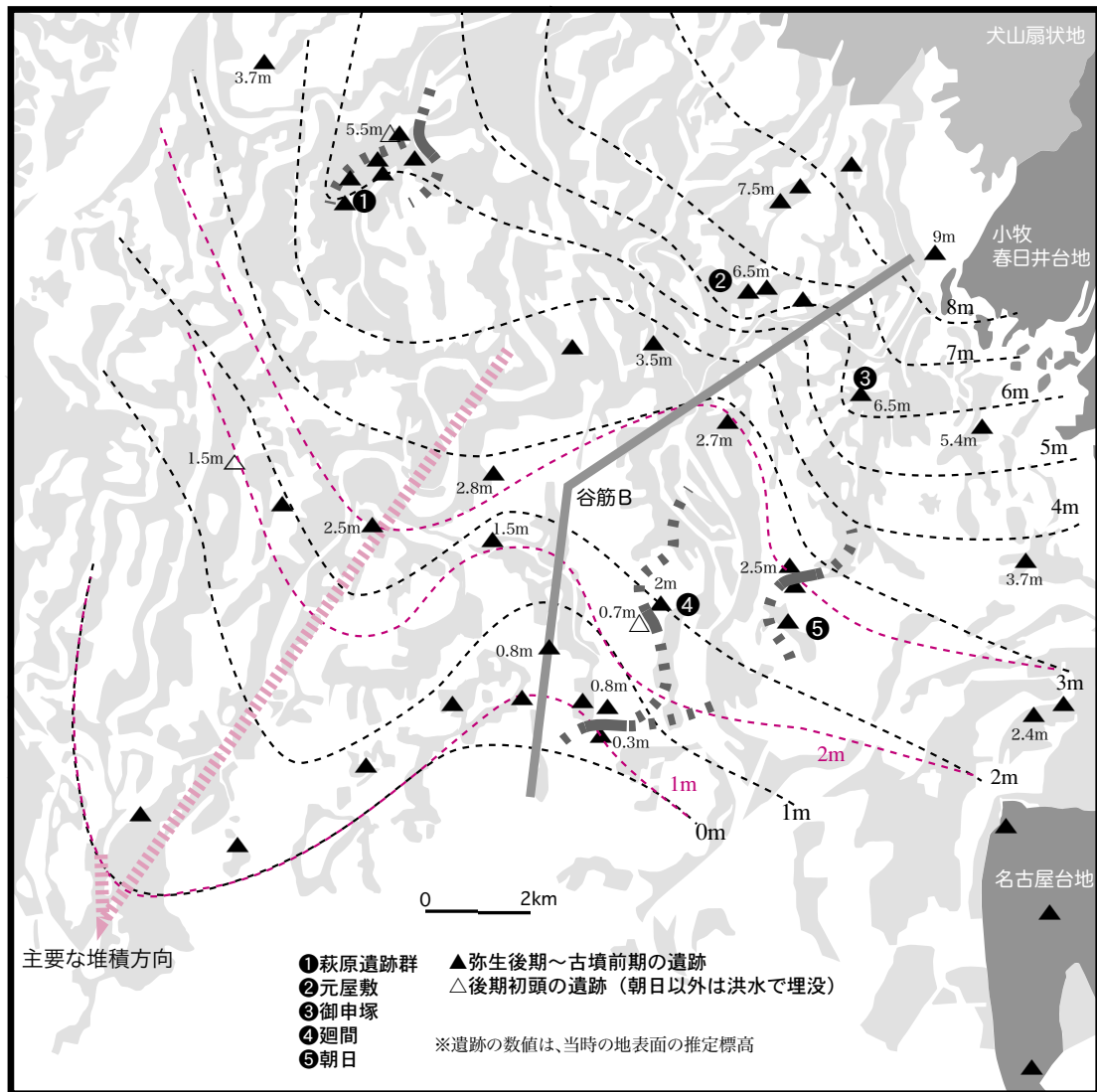


図5 濃尾平野南部弥生後期～古墳初頭遺跡分布図

で空白期である。この地域では一般的に弥生時代の遺跡形成は低調なようだが、かえってIV期における遺跡形成の活発さが際立つ。

(2) 矢作川下流域・豊川下流域

矢作川流域は豊田市域から下流に向けて2km～5kmの幅で段丘に挟まれた氾濫平野が続く。安城市・岡崎市から西尾市にかけて矢作川は碧海台地を横断して流れるが、それは江戸時代の付け替えによるのであり、本来は矢作古川が流路であった。矢作古川の下流域における弥生時代の遺跡分布は、弥生後期には兩岸の台地・丘陵上に分布の重心がある。低地側は不明瞭であり、確実に集落と考えられる遺跡は認

められないようである。縄文晩期から弥生前期にかけて、そして弥生後期の2度の寒冷化と小海退によって河口部の形状は大きく変貌したであろうが、それを確実に把握できるだけの情報は残念ながら得られていない。いまだ埋没して、人知れず眠ったままの遺跡があることだろう。

矢作川の流路がけって固定していなかったことは「矢作川河床遺跡群」の存在から明らかである。しかも、それは矢作川の堆積の進行速度（天井川化）が速いことも複合的に関係しているのである。現在は段丘面も1面しか認められないのだが、地表面形成において地盤の隆起現象よりも天井川化がより強い要因であっ

たならば、より低位に段丘面が存在した可能性は否定できない。となれば、下流域における沖積面の形成も同様に考えなければならないだろう。つまり、伊勢湾西岸域や知多半島の西側沿岸で明瞭に形成された砂堆が三河湾沿岸で不明瞭である点は、確かにより内湾に位置しているための沿岸流の弱さにも一因があるのかもしれないが、矢作川の運搬量の多さからいえば沖積作用が勝った結果であるといえるかもしれない。

矢作川河口左岸から豊川河口右岸にかけては丘陵が海に向かってせり出し、沖積平野の形成は低調である。陸・海が直接する区域となっている。

豊川下流域は豊川市域から下流に幅 4km ほど沖積平野が続く。両岸の段丘面には縄文・弥生の遺跡が重複して分布し、沖積平野には縄文晩期後半から遺跡が形成される。

弥生時代には瓜郷遺跡や篠束遺跡等の学史的に著名な遺跡が分布する。瓜郷遺跡には貝塚・貝層が形成され、土壌分析から汽水域であったことが判明している。篠束遺跡は近年調査されたが、区画整理事業による削平の為に十分な成果を得ることはできなかった。

土地条件図によれば河口域周辺には砂堆が分布するようだが、矢作川河口域同様に伊勢湾西岸域に比べて貧弱である。これも沖積作用が原因なのかどうか、その判断は今後の調査によるところが大きい。

4 おわりに

以上、やや駆け足で伊勢湾周辺の地形を概観した。以下に要約する。

註

1) 濃尾平野の変遷についての基本的理解については以下を参照。

井関弘太郎氏は 1962 年に濃尾平野の基本的堆積構（沖積層基底礫層〔第一礫層〕／下部砂層／中部シルト・粘土層〔中部泥層〕／上部砂層／沖積陸成層〔頂部泥層・頂部礫層〕）を明らかにするとともに、最終氷期最盛期以後の海水準変動とが関連することを指摘した（井関弘太郎 1962 「沖積平野研究の基礎的問題点」『名古屋大学文学部研究論集』X XVI）。

1972 年には、沖積面下にある埋積浅谷の形成と海面高度との関連の指摘し、海水準変動について具体的に言及した（井関 1972 「日本における三角州平野の変貌」『第四紀研究』11）。同一年、古川博恭氏は 2500 ～ 1500 年前の 2 m 以上の海水準低下を指摘し、「弥生の小海退」と呼称（古川博恭 1972 「濃尾平野の沖積層-濃尾平野の研究その 1-」『地質学論集』7）し、井関氏も賛同した。

井関氏は 1975 年に縄文前期の海進期における海岸線の推定を行った（井関 1975 『新修稲沢市史』研究編 3）。

① 西岸域は、平野の面積が思いのほか狭い。縄文晩期に活発化した流路によって自然堤防が形成され、また成長し、弥生時代における遺跡展開の基盤を形成したが、平野の地表面そのものは形成途上にあった。特に安濃川下流域は詳細なデータによって地形環境の理解が進んだが、他地域でも同様なデータの集積が望まれる。

海岸付近では、鈴鹿川・雲出川・櫛田川などの運搬物によって縄文晩期までに砂堆が形成され、一部は陸化していた可能性がある。しかし、砂堆はその後の沈降や浸食、また開発によって変形し、詳細は明確ではない。

② 濃尾平野は調査地点の数量がいまだ不十分ではあるが、海岸線について見通しを得るに至った。ただ、海岸線は固定されたものではなく、汀線は干満や海水準変動によって前後・上下に移動し、また潟・湿地帯もからんで幅をもったもの、つまり曖昧にならざるをえない。

平野を考える上で重要なのは自然流路の把握である。しかし、自然地形は埋蔵文化財調査の直接の対象とはならないため、遺跡の範囲をどのように認識するのかという点とも関係して、調査データの集積は容易ではない。立ち会いなどあらゆる機会を見つけて対応するしかないのが実情である。

等高線図については今後の調査地点の増加によって精度は増すであろう。結論を急ぐ必要は無い。

③ 矢作川・豊川流域は、中流域における埋没地形の把握と、最下流域・河口域のデータを蓄積する必要がある。まずは沖積平野における遺跡の内容把握が先決である。



海津正倫氏は1976年、沖積層上部砂層上面の高まりを縄文海進時の汀線に沿って形成された砂堆との類似を指摘した。(海津正倫1976「津軽平野の沖積世における地形発達史」『地理学評論』49)。

1982年、大田・松島・森脇は、「縄文中期の海退」と「弥生の小海退」について報告した。(大田陽子・松島義章・森脇広1982「日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題—Atlas of Holocene Sea-level Records in Japan—を資料として」『第四紀研究』21)

森勇一氏は1992年、埋積浅谷の形成期は、朝日遺跡では縄文中期に遡り、谷底は海拔-2mに及ぶことを確認。縄文後期の再海進を指摘した。朝日遺跡では+1.5m、名古屋市菩薩遺跡では+2mまで海水面が上昇したと指摘した。(森勇一1992「朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境」『朝日遺跡Ⅱ』)

なお、同書において上部砂層の高まりを「浜堤」(森1992)と呼称したが、なお決着はついていない。定義の問題(内湾のそれを「浜堤」に分類しない)なのか、高まりが果たして帯状に分布するのか、いずれにしても確定していない。

2) 時期区分案は以下のとおりである。

I期:弥生前期、II期:中期前葉(朝日式期)、III期(貝田町式期)、IV期(凹線紋系土器期:高蔵式期はこの時期の最末期)、V期(初頭:八王子古宮式期・見晴台式期、前半:山中式期)、VI期(欠山式期・期廻間1式期)、古墳I期(元屋敷式期・廻間2式期)。

3) 固定した2点の標高がわかれば、2点間の傾斜を一律と看做して機械的に標高を配分することができ、その作業を周辺に拡大して等高線を作製する。計測点が増えればそれだけ精確になるが、少なれば歪みも大きい。少数の発掘調査成果に依拠するのではなく、試掘調査や立ち会い調査などの膨大なデータを活用すれば、より精度は増すので、研究レベルではなく、行政的な作業の一環として進めるのが現実的であろう。これによって沖積地の埋没微地形を復元すれば、高橋 学氏が説くように遺跡の分布を予測することが可能になり、埋蔵文化財保護にも貢献しよう。

付記

脱稿後、2006年2月4日に開催された考古学研究会東海例会(静岡大学)において篠原和大氏の作成した静岡平野・瀬名遺跡の土層セクションの接合・復元図に接した。報告書を丹念に読み込み地表面の変遷をトレースしたその作業結果には高い価値がある。細部に問題があるとしても、それは作成者である篠原氏の責任ではない。

行政は確かに精度の高い調査を行うこともあるが、調査区が複数にわたる場合には担当者も複数となり、遺跡の調査成果もモザイク化することが多い。遺跡像をどのように捉えるのかという観点に立てば、篠原氏の行った作業は報告の前提になるものであり、それが提示されてこなかったことが問題である。今後沖積地の調査において堆積学的な成果を自然地理学者にまかせるのではなく、自らが旧地表面の変遷について強く関心を持って復元作業を継続する必要がある。そこまでがわれわれ現場の調査担当者の仕事である。

参考文献・引用文献

安田喜憲1979「IV・三重県津市納所遺跡の泥土の花粉分析的研究」『納所遺跡-その自然環境と自然遺物-』三重県教育委員会。

三重県埋蔵文化財センター1997『安濃津』。

森 忍 1985「ケイソウ化石群集による土田遺跡59A区基盤の堆積環境」『埋蔵文化財発掘調査年報』愛知県埋蔵文化財センター。